

第4学年国語科の実践

1 単元名 自分の考えを深めよう 教材文「さわっておどろく」

2 単元目標

単元
目標

- ・事実と考えを関連づけながら、筆者のものの見方や考え方を読んで、自分の考えを深めることができる。
- ・身近にある「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」について調べ、自分の感想を交えて報告をまとめることができる。

3 ひびきあう子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題をもち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手立て・・・子どもの願いや思いの育ちを見取った単元構想と授業づくり
ブロックテーマ「追究する力、仲間と支え合う自分」
・自分の問題をとことん追究する姿・仲間と協働して追究する姿

<聴く・話すについての指導>

クラスの授業中のルールは、4月からただ1点「人の話をしっかり聴く！」である。

話す内容が事前に決まっていれば、多くの児童は発表することが可能である。しかし、自分の発表さえ終わってしまえば、他の児童の発表に対して無関心な児童が多く、声が小さくて聞き取れなくても、そのまま放置されることが多かった。全体的に声が小さいのは、聞き手から聞き返されることが少なく、いままではそれで良しとされてきたため、習慣化されてしまっている。総合的な学習の時間のように話し合いの時間と定めた場合は、オープンスペースにホワイトボードを持ち込んで、非常に近い距離での話し合いを設定してきた。友だちの話がしっかり聞こえるような環境を工夫することによって、互いの話や考えを聴き合おうとする文化は育ちつつある。

<これまでの関わり合い・ひびき合い>

理科の「電気のはたらき」の学習では、車を早く走らせようと、乾電池のつなぎ方とモーターの回る速さの関係について積極的に調べていった。考えるよりも試行錯誤をしながら答えを見つけ出そうとするやり方の児童が多い。その際、情報交換は活発に行うことができ、活動を伴った学習には生き生きと取り組むことができる。しかし、実験結果から考察へとつなげていく力は弱く、クラス全体が参加しての話し合いに広げていくことは難しい。

国語の授業においては、PISA型の読解力の重要性が言われるようになり、「書かれている内容を正しく読み取る」ことを中心とした読みから、「筆者の意図を推論する読み」や「筆者の考えや述べられている事実・事柄、述べ方などに対して、自分の考えをもち表現する読み」が求められるようになってきた。研究課題に迫るためにも、後者のような学習を充実させていく必要がある。4年生の説明文の指導については、いままで「ムササビのひみつ」「アメンボはにん者か」「地下からのおくり物」といった説明文で連続して扱ってきた。そのため、本文を正確に読んでまとめるという作業については、だいぶ慣れてきている。その後、それらを読んだあとに自分なりの考えを書いたり話し合ったりする段階に移るのだが、自分なりの考えをしっかりと持つことがなかなか難しいのが現状である。それでも3つの教材文の中で「アメンボはにん者か」は比較的多様な考えが出された。それはアメンボが身近な存在であり、自分たちも利用する水に関する環境問題であったことと、実験結果を交えて具体的に説明されていたことによって、理解しやすかったことが想像される。

現在、総合的な学習の時間では、6月には児童の興味のあることからテーマを決定していった。最終的に絞られて2択となった場面では、それぞれが自分の主張をするばかりで平行線の状態が長く続いた。「ひびき合う」ためには合意形成能力も必要な要素になってくると思うが、そうした力はまだ十分に育ってきているとは言い難い。その前段階として、一人一人が異なる意見を持ったり、様々な意見を言えたりするような学級の雰囲気は出来てきているにしても、相手の意見の合理性と自分の考えを比べ、客観的に判断するだけの経験がまだ不足していると言える。

10月に入ってから物語文「一つの花」では、学習の最後に、題名である「一つの花」の意味や作者の伝えたかったことについて考えた。物語を丁寧に読み取った後だけに、自分なりの考えをそれぞれが持つことができ、友だちの考えに共感したり、付け加えをしたりをしながら多くの児童が参加することができている。学習して読み取ったことを根拠にして話を進めるため、本文に対して児童がいかに関心しているかが鍵となる。

4 単元と指導

<単元について>

教材文の元になった「さわっておどろく！（岩波ジュニア新書）」の中で、著者の広瀬氏は次のように述べている。『いろいろな物にさわる中で、自分は触覚の存在を忘れていたと悟るのが「愕く」です。眠っていた潜在能力を再発見するという意味で用いています。びっくりするという表面的な心の動きが「驚く」だとすれば、「愕くは」もっと深い身体的な感動です。』

本単元の教材文では、目が見えなくても楽しめる社会にすることや、それぞれの「見る文化」と「さわる文化」の特徴を学び合う、双方向のコミュニケーションの実現が筆者の主張といえる。そのきっかけとして、「さわっておどろく」ことを話題とし、自分の持つ触覚の存在を発見し、そのよさに気づいてほしいという願いも込められている。この単元では、筆者の考えに対する自分の考えを持つことをねらいとしているが、本文を読むことをきっかけとして、自分の持つ感性について振り返ってみることも大切にしたい。

なお、本教材文の特徴は、「さわる」という事柄について複数の視点から筆者が考えを述べている点にある。「だから」「そこで」「要するに」など、前述の内容との結びつきを示す語句が多く使われている点も特徴と言える。そのことから、事実と考えとのつながりに気をつけながら読むのに適した文章と言える。筆者が「さわる」という事柄について、どのように考えを深めているのか、文章全体の構造についてもふれておきたい指導事項である。

<指導について>

本単元の教材文は題名を伏せて児童に提示する。前単元の「一つの花」で、題名には意味が込められていることを強く学習してきたことから、今度は逆に、教材文から筆者の主張や思いなどを読み取ったことをもとに、児童自らが題名を推測しようとするように仕向ける。そのことによって筆者の主張を教材文から読み取る必要性が生まれてくるようにする。つまり、ここでの問題は単元を通して「筆者の伝えたいことは何か」を考えていくことになるだろう。

「書かれている内容を正しく読み取る」ことについては、いままでの説明文の学習で取り組んできた様子を見れば、それほど難しい文章ではない。事実と筆者の考えが分かりやすくまとめられているため、児童にとっては比較的とらえやすい文章である。しかし、児童の生活体験の中で、積極的にさわってみようとする行為は習慣化されているとは思えない。それだけに、「さわっておどろく」という筆者の伝えたい本当の意味が、教材文を読んだだけで児童がとらえられるかという、実体験なしに理解することは難しいと考える。ただし、初発の感想の中には、「自分も何か触ってみてみたくなった。」「ユニバーサルミュージアムに行ってみたい。」という活動的な内容も入ってくるだろう。読み取りに加えて体験することの意義を話し合った上で、生命の星・地球博物館での体験を、学習の途中に組み入れたい。目をつぶって対象に触れる体験をすることで、それまでにはなかった気づきや感覚に児童が出会えるようにする。そのような経験を通して本文に立ち戻れば、筆者の主張をより理解することができるだろう。この体験をよりどころにして、筆者の主張のどこに共感するのか、あるいは自分はどうのように考えるのかといった自分なりの主張を持たせるようにする。その際、教材文に対してそれぞれの共感する部分が異なれば、「筆書が投げかけた「さわっておどろく」の意味について多様な視点から解釈をし、自分なりの考えを深めていくこと」ができるだろう。そして、「筆者の伝えたいことは何かを考えつつ、この教材文に適した題名は何かを考えていこうとする姿」をひびき合いの姿としたい。

また、文章自体は難しくないが、全盲、視覚、点字、民族博物館、ハンディ、ユニバーサルデザインといったやや難解な言葉が本文中に出てくる。それぞれについて説明はあるものの、読み取っていく際には気をつけなければならない部分である。国語辞典を活用するなどしながら、本文をしっかり読み取っていくようにしていく。

さらに、教材文を読み、視覚障害者の話題に触れることで、児童は点字やユニバーサルデザインといった身の回りにある配慮や工夫に関心を持つようになるだろう。教師の紹介によって、盲導犬などにも話を広げてもいい。この学習をきっかけとして、将来的には街角で見かけた点字に何と書いてあるか興味を持ったり、盲導犬の募金へ理解を示したりできる大人になって欲しい。あるいは進んで視覚障害者に手をさしのべたり、共に活動できたりするような心も育てたい。そうした願いを持って、各自が興味を持ったことについて調べ、報告する機会を持ちたいと考えている。その際、教材文から学んだ文の構成なども生かして、なぜそのような活動や工夫がなされているのか、事例を挙げながらそれに対する自分の考えをまとめられるようにする。

4年国語 自分の考えを深めよう 教材文「さわっておどろく」単元構想 (全10時間：本時7時間目)

★単元のねらい

- ・事実と考えを関連づけながら、筆者のものの見方や考え方を読み、自分の体験とも関連付けながら考えを深めることができる。
- ・身近にある「ユニバーサルデザイン」「点字」などについて調べ、自分の感想を交えて報告をまとめることができる。

教材文「さわっておどろく」
題のない状態で読む

教材文は題を消し、行間に書きこめるようにしたものを用意する。
初発の感想をもとに、読みの課題を設定していく。

タイトルは何だろう。点字は見たことあるよ。どうやって読むのかな。
目を閉じて何か触ってみよう。なんだかおもしろそうだ。 筆者は目が見えないのに博物館で仕事をしてすごい。
ユニバーサルミュージアムに行って、自分も体験してみたい。
「見る文化」「さわる文化」の特ちょうを学び合う、両方向の矢印が成り立つのではないのでしょうか・・・最後の段落の意味がよく分からなかった。

体験して考えよう!

生命の星

地球博物館へ

<ユニバーサル
ミュージアム>

●隕石

・すごく固くてひんやりしている

・重たい

こんなのが宇宙から落ちてくるの？

●アンモナイトの化石

・意外と大きいな

・丸くて模様が入っていて不思議な形

●ヒグマのはく製

・毛がすごくごわごわしている

・爪が大きくて固いね

○見るだけより触ってみるといんなことが分かるよ

○触れるところがたくさんあるんだ

○点字がこんなにたくさんあるなんて知らなかった

博物館への取材

・誰にでも開かれた博物館でありたい

・触ってよい展示

・点字による案内

・視覚障害者の来館が増えてきている

この説明文の題は何か
考えよう

目の見えない人のことについて
もっと知ろう

筆者の伝えたいことは何だろう

- ・文章を丁寧に読んでみよう。全18段落
- ・分からない言葉は調べよう。全盲・盲学校・視覚しょうがい者ハンディ・観らん・ユニバーサルデザイン きかく・視覚⇄触覚・サポート
- ・意味の分からないところは、みんなで話し合おう。
- ・文章をもう少し簡単にまとめてみよう。
- ・目を閉じて何か触る体験をして、筆者の言いたいことを考えてみよう。

- 点字について調べてみよう
点字の仕組み
点字を読んでみる
自分の名前を点字で書く
点字はどこにあるかな
- 身の回りのバリアフリーにはどんなものがあるのか調べてみよう
シャンプーとリンスの印
お札の印
新しい電池を見分けるためのパック
- 盲導犬について調べてみよう
盲導犬が大型犬なわけ
必要な数と実際の頭数
盲導犬を育てる仕事
盲導犬に出会ったら

- ・キーワード、キーセンテンスの発見
- ・全体の構造をとらえ、意味段落ごとに要約する

筆者の伝えたいことを話し合おう (本時)

- ・さわって大事なことなんだ。
- ・「さわること分かるおもしろさ」「さわらなければ分からない事実」「さわる文化」の意味が分かった。
- ・ユニバーサルミュージアムでは、さわれる展示がたくさんある。障害者のためじゃなくて自分たちも楽しみたいのもったいない。
- ・筆者の考えたことは博物館の人たちにも伝わっていて、がんばっているんだ。
- ・「両方向の矢印」というのはどういうことかな？

分かったことを報告しよう
点字・身の回りのこと・盲導犬

この学習を通して自分が学んだこと、考えたこと

- ・目で見るだけではなく、さわることも大切にしていきたい
- ・目の不自由な人について、もっと関心を持つようにしたい

筆者の考えについて、
本文を読んだこと、
体験したこと、
調べたこと
を基に、自分の考えをまとめる

この説明文の題について話し合おう

- ・さわることの大切さを入れたい
- ・さわることの良さに気づくようなタイトル
- ・目の不自由な人だって優れてるんだということも伝えたい
- 「さわっておどろく」「もっとさわってみようよ」
- 「自分の触覚の存在をわすれていませんか」「視覚障害者から学ぼう」

6 本時について

(1) 本時目標 自分の体験と本文を関連付けながら、筆者の伝えたいことやそれに対する自分の考えを表現することができる。

(2) 本時展開

学習活動	主な支援・留意点【評価】
<p>問題</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>筆者の伝えたいことは何だろう</p> </div> <p>生命の星・地球博物館で体験して、なるほどと思ったり本文の意味がよく分かるようになったりしたところ</p> <p>「じっくりさわっているうちに、何なのかが分かる」</p> <p>「自分は触覚のそんざいをわすれていたことに気づく... という体験」</p> <p>「さわることで分かるおもしろさ、さわらなければ分からない事実」</p> <p>「目が見える人たちは気づいていないのではないか」</p> <p>筆書の主張について考えよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユニバーサルミュージアムでは、さわれる展示がたくさんある。障害者のためじゃなくて自分たちも楽しまないともったいない。 ・目の不自由な人にも自分達より優れたところがある。 ・助けてあげるといいうことだけじゃなくて、教えてもらうことがあってもいい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>この説明文の題について考えよう</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・さわることの大切さを入れたい ・さわることの良さに気づくような題 ・目の不自由な人だって優れているんだということも伝えたい <p>「もっとさわってみようよ」</p> <p>「自分の触覚の存在をわすれていませんか」「視覚障害者から学ぼう」</p>	<p>●本時の内容は単元の初めに決まっていることなので、博物館から帰ったら、自分の考えとタイトルを書かせておく。</p> <p>●教材文全体を対象とし、体験に基づいた読みの理解を深める。</p> <p>●筆者の主張が示されている最終段落について、自分たちなりの解釈ができるように話し合いをする。 特に、一読してよく分からなかった部分について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「見る文化」「さわる文化」 ・両方向の矢印が成り立つ など <p>●前時に各自で考えた題について、本時の話し合いを受けて筆者の主張を考慮に入れてあるかどうか再度検討する。 題を付けた理由も記述する。 クラス全体での検討は次時に行う。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>◇自分の体験と本文を関連付けながら、筆者の伝えたいことやそれに対する自分の考えを表現することができる。【読む】(行動観察・ノート)</p> </div>

7 実践をおえて

(1) 本時に至るまでの経過

初発の感想を見てみると、分かったようで分からないことがたくさんあることが伝わってきた。本文自体は難しい文章ではないものの、視覚障害者とか点字などの言葉は知っていても、それらは子ども達にとって身近な存在ではないからである。特に、ユニバーサルミュージアムについてのイメージが難しく、それと共に、どんな所だろうかと関心が高かった。また、筆者の主張がある最終段落についても、『見る文化』『さわる文化』の両方向の矢印が成り立つ」といった表現を理解することは簡単ではなく、かなり読み込まなくては理解できそうもないことを児童は感じ取っていた。さらに、題名が削除されていることについては誰もが気づき、そこには筆者の主張が関わってくるのだろうということを多くの児童が想像することができていた。

これらの事柄を出し合うことを通して、題は何なのかを考えていくことが本単元の問題となり、そのためには筆者の主張を読み取っていくことが必要であるという流れが自然と出てきた。また、生命の星・地球博物館がユニバーサルミュージアムに位置づけられていることを知らせると、ぜひ行って理解を深めたいという意欲を持つことができた。実際に博物館に行き、目をつぶって展示物をさわるという経験は、本文の理解を深めるだけではなく、しっかり読んでみようとする意欲にもつながった。

(2) 本時での様子

筆書の主張について考えていくことが本時の大きなねらいであったが、その前段階として、生命の星・地球博物館での体験を経て、なるほどと思ったり本文の意味がよく分かるようになったりしたところを話し合った。この点については、ユニバーサルミュージアムや点字、人によるサービスとはどんなものなのか、友だちの話を聞くことでさらに深めていくことができたと言える。ただ、筆者の主張部分については自信を持って発言できる子があまり多くはなく、聞き手として専念してしまうことが多かったので、十分な話し合いの時間だったとは言えない。しかし、個々で考えた説明文のタイトルが、この話し合いによって変化し、タイトルの内容も筆者の主張を意識したものになっていった児童も多く現れたことから、自分なりの考えを再構築する有意義な時間になったのだと考える。以下、個人の変容例である。

・「さわって楽しむおもしろさ」→

「『視覚にたよって生活する人』と『触覚にたよって生活する人』のコミュニケーションをよくしよう」

・「さわらなければわからない事実」→

「さわって視覚しょうがい者としょうがいのない人の関係を深め合おう」

・「目をとじて点字をさわろう」→ 「『見る文化』『さわる文化』の関係」

なお、この説明文の正式なタイトルは「さわっておどろく」である。それに比べれば児童のタイトルは長目になってしまっているが、筆者の主張を盛り込もうとした結果であるので、今回はそれで十分であると考える。

(3) 単元を通しての成果と課題

<成果>

説明文のタイトルを伏せることによって、本文をしっかり読み取り、筆者の主張を考えていこうとする学習の流れができた。特に、学習の最後にタイトルを検討することにしたので、本文を読む際には常にその学習問題を意識することができた。また、実際に体験をすることは児童の本文への理解を深め、さらには学習意欲を高める結果につながったことと思う。また、文章を正確に読解するという事務的な読みにとどまらず、筆者の伝えたいことなどにも児童は関心を持つことができた。学習後の感想として、「近所に盲導犬を連れてくる人がいるけど、盲導犬がいたから手伝わなくてよいと思っていました。でも、何か手伝えることがあれば手伝った方が、目が見える人と見えない人の関係も変わってくると思いました。」のように、児童の心が成長したことも大きな成果だと言える。

<課題>

個々に考えを持ったとしても、すすんで発表するという機会につながらないケースがあった。本時では発表しやすいようにと項目を立ててすすめたが、どこで話せばよいのか戸惑う場面もあったようだ。全く自由に発言させてしまうことも考えられるが、話のつながりといった点で問題が出てきてしまいそうである。普段の授業から、積極的な話し合いができるようにしていき、それぞれの児童が慣れることができるようにする必要があると思う。